



Title	コミュニケーション能力の育成と相互文化の意識を高める授業をめざして
Author(s)	葦原, 恭子
Citation	琉球大学大学教育センター報 = University Education Center Bulltein 琉球大学大学教育センター報 = University Education Center Bulltein(23): 83-89
Issue Date	2021-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48365
Rights	

コミュニケーション能力の育成と相互文化の意識を高める授業をめざして

葦原 恭子

グローバル教育支援機構 国際教育センター 留学生ユニット

要 旨

琉球大学では、1998年から2020年にかけて世界42カ国・104の協定大学から1,150名の留学生を受入れてきた。この間に、留学生の受け皿は、留学生センターからグローバル教育支援機構国際教育センターに移行した。移行に伴い、留学生対象の日本語教育科目についてカリキュラム改革が実施された。このことにより、留学生にはより幅広い授業の選択肢が与えられ、自律的な授業選択が可能となった。

本稿は、留学生対象の日本語科目の中から「聴解CIS」という授業を取り上げ、授業実施前と実施後に受講生の自己評価を調査した結果と共に実践報告するものである。当該授業においては、Can-do statementsのすべての項目において、受講生の自己評価が高まったことが明らかとなった。

キーワード

タスク・リスニング, CLIL, 聴解ストラテジー, Can-do statements

1 はじめに

日本政府は、1983年に留学生10万人計画を提唱した。そして、留学生に対する日本語教育の効果的な実施および留学生の教育・研究、あるいは社会生活への適応上の問題に対する指導援助を一元的に行う目的で、1989年より2005年にかけて、国立大学に留学生センターおよびその事務を担当する留学生課が相次いで設置された。このような流れの中、1998年に琉球大学にも留学生センターと学生部・留学生科が設置された。以来、琉球大学では、1998年から2020年にかけて世界42カ国・104の協定大学から1,150名の留学生を受入れてきた。その後、日本国内においては、2004年4月の国立大学の法人化後、国際交流業務の一括管理運営体制を敷く大学が増加した。このことにより、日本語教育・留学生支援を担当する留学生センターから国際センターや国際戦略室等になるなど組織改編が進んでいる。琉球大学においては、2015年7月にグローバル教育支援機構が設置され、これに伴い、アドミッション・オフィス、大学教育センター、外国語センター、就職センターと共に、留学生センターもその傘下となり、名称も「国際教育センター」と変更された。留学生センターにおいては、所属教員は、琉球大学で学ぶ大学院生、学部生、交換留学生等、留学生の教育に特化した業務を中心に活動していたが、グローバル教育支援機構においては、日本人学生の海外派遣と外国人留学生の受入れが同一部門で行われるため、国際教育センターとして学生の国際交流のさらなる促進、ひいては、琉球大学全

体のグローバル化に貢献することが可能となった。組織改変後、国際教育センター留学生ユニットとして、まず、着手したのは留学生対象の日本語教育のカリキュラム改革である。従来は、共通教育科目と留学生センター科目として提供していた授業を一元化し、CEFRⁱに準拠したA1からC2レベルの四技能別を提供することとなった。また、従来は、留学生の指導教員となった留学生センター教員が決定権を持ち、留学生に一群の受講科目を指定して受講させていたが、改革後は、すべての留学生が、日本人学生と同様に、登録期間中に様々な授業に参加し、その上で各自のニーズと能力レベルに合致した授業を自由に選択することが可能となった。本稿は、このような改革の結果、提供が可能となった留学生対象の日本語科目の一つである「聴解C1S」に関する実践報告である。

2 授業概要とその背景

2.1 授業の概要

「聴解C1S」は、中上級レベルの学習者対象の聴解クラスである。CEFRの6レベル（A1, A2, B1, B2, C1, C2）では上から2番目のレベルであり比較的高いレベルの日本語能力を持った学習者が対象である。「S」とは「Spring」の略で、この授業が前期に実施されたことを意味する。

シラバスに記載されている授業内容と方法は次の通りである。

「報道番組、文化的な話題、日本及び沖縄事情を取り上げ、ドラマ、映画、アニメ、ドキュメンタリー番組を聴解することにより、日本語聴解力の向上のみならず、異文化理解能力も養成する」。

また、達成目標は次の通りである。1) 聴解におけるスキミング（ざっと聞いて大意を取る）能力、スキヤニング（情報を取りながら聴く）能力、マッチング（情報と情報を照らし合わせる）能力を身につける。[コミュニケーション・スキル] [情報リテラシー] [専門性] 2) 報道番組を聴いて概要がわかるようになる [社会性] [地域・国際性] [専門性] 3) 自分が関心のあるテーマについて理解し、意見を述べるようになる。[自律性] [地域・国際性] [情報リテラシー] [問題解決力] [コミュニケーション・スキル] [専門性]

この授業の構築にあたって背景となっているコンセプトがある。それは、「タスク・リスニング」「聴解ストラテジー」「CLIL」である。次節からは各コンセプトと当該授業の関連性について述べる。

2.2 タスク・リスニング

Ur (1984) は、タスクを設定することによって、聴解練習はより効果的になるとしている。それは、タスクが発話を聞く理由付けとなるだけでなく、聴解する目的、反応のしかた、聞く前に予想すべきことがはっきりわかるようになるためであるという。そして、タスク教材を作成する際の留意点として、次の6点を挙げている。1) 消極的反応より積極的反応の方が楽しい、2) タスクはsuccess-orientedにする、3) タスクはテストとは異なる、4) タスクはシンプルな方がいい、5) フィードバックは即座に行うべきである、6) ヴィジュアルな手がかりは満載すべきである。

「聴解CIS」の授業で使用するタスク聴解教材開発にあたっては、Ur (1984) の聴解理論を元に、素材を選び、タスクを設定し、聴解教材を作成した。そのプロセスは次のようである。1) 教材となるビデオ素材を選択する、2) ビデオを一通り見て、スクリプトを作成する、3) スクリプトから語句リストを作成する。4) 場面などによって全体を短いかたまりに区切り、かたまりごとにタスクを設定し、タスクシートを作成する。5) タスクシートには、あらずじ、登場人物、番組紹介などは必ず入れるようにするが、必要に応じて背景知識を導入するための追加資料となるシートを作成する。

1) で教材として選択したビデオは、ニュース、ニュース番組、ドラマ、日本語に関するバラエティ番組、沖縄文化を紹介する情報番組、平和学習につながる沖縄戦や基地問題に関する番組等であり、すべて生教材である。2) の作業は、ビデオ全体の流れを確認し、授業中に教師が内容確認に使用するためのものである。タスク聴解クラスでは、スクリプトを学習者には配布しない。3) の語句リストには、「通し番号、キーワード、読み方、意味」の欄があるが、「意味」欄は空白にしておき、事前学習として配布し、辞書を引かせ、母語で意味を書かしておく。この語句リストがあることによって、すべてを板書する必要がなくなり、効率化が図れる。また、通し番号があれば、ターゲットとなる単語を容易に指示できるというメリットがある。4) タスクを設定するときは、いくつかの聞き取りのパターンを用意する。例えば、発話された語や表現そのものを聞き取るもの、登場人物の行動を描写させるもの、登場人物の心情を推測するもの、情報を総合して、原因や結果を導き出すもの、学習者自身の意見を書かせるもの、等である。その際、聴解のマイクロスキルである、スキミング（大意取り）、スキヤニング（情報探し）、マッチング（情報の照合）などをバランスよく、ちりばめるように意識する。4) の短いかたまりには、基本的には一つのタスクとしてpre-questionが設定され、タスクが達成されるまでは、次のかたまりを見せないようにする。正確さの練習では、まず、すべてを聞かせてから、かたまりにわけて聞かせ、再度、全体を聞かせるといったプロセスをたどることがあるが、タスク聴解ではそのようなプロセスは不適切である。これは、実生活の聴解活動では、そのような活動はないことや、すべてを聞かせてしまって、再度、同じものを聞くということは、二度目は明らかに練習のためであるということになり、学習者の素材に対するモチベーションや興味を半減させるからである。5) のように背景知識を前もって与えておくことは、タスク聴解練習には非常に重要である。その際、ネイティブの日本人なら既知であることが当然で、説明が不要であると思われることや、ビデオを見ているうちに察することができる事実なども、あえて説明しておくことが必要である。

2.3 聴解ストラテジー

Mendelsohn (1995) は、第二言語教育に関わる教師の課題は、聞く機会を学習者に与えるだけでなく、どのように聞くかを指導することであると指摘している。そして、効果的な聞き方を指導するには、聴解における情報処理の過程や熟達した聞き手とは何かに注目する必要があるという。

O'Malley et al. (1989) は、「熟達した聞き手」、つまり、効果的な聴解活動を行える学習者の特徴として以下の点を挙げている。1) 聞き取れない部分に拘泥せず、スキップすべきするところはスキップできるモニター力がある。2) 基本的にはトップダウン処理をしているが、必要に応じてボトムアップ処理で補うことができる。3) 単語単位で聴き取るのではなく、意味処理の単位が大きく、句や文などの固まりで聴いている。4) 聞き取りの際に、一般知識や個人的

な体験に基づく知識をよく活用している。「聴解CIS」は、タスク聴解教材を活用した聴解の授業であり、学習者に熟達した聞き手としての聴解ストラテジーを体験させることが可能となる。

2.4 CLIL

笹島（2020）は、CLIL について次のように述べている。

CLIL は、Content and Language Integrated Learning の略称です。教科科目やテーマの内容（content）の学習と外国語（language）の学習を組み合わせた学習（指導）の総称で、日本では、「クリル」あるいは「内容言語統合型学習」として呼ばれ定着しつつあります。主に英語を通して、何かのテーマや教科科目（数学（算数）、理科、社会、音楽、体育、家庭など）を学ぶ学習形態を CLIL と呼ぶ傾向があります。CLIL の主な特徴は、学習内容（content）の理解に重きを置き、学習者の思考や学習スキル(cognition)に焦点を当て、学習者のコミュニケーション能力（communication）の育成や、学習者の文化（culture）あるいは相互文化（Interculture）の意識を高める点にあると言えるでしょう。

「聴解CIS」は、この理論を援用し、シラバスに記載している通り、報道番組、文化的な話題、日本及び沖縄事情を取り上げ、ドラマ、映画、アニメ、ドキュメンタリー番組を聴解することにより日本語聴解力の向上のみならず、異文化理解能力も養成することを目指している。教材化するビデオ教材については、受講生が世界各国からの大学生であること、日本と沖縄の文化・歴史・政治・習慣に関心が高いことに留意しつつ選定した。2018年前期に使用したビデオ教材は次の通りである。

1) テレビドラマ「辞令は突然に（沖縄編）」：東京出身の夫婦が沖縄に転勤になり沖縄文化に触れる。2) バラエティ番組「秘密のケンミンSHOW」：沖縄県民の見分け方として「ましようね」という沖縄の地方共通語を紹介する。3) 情報番組「この差って何ですか」：上座と下座、日本（にほん）と日本（にっぽん）など様々な差を検証する。4) 情報番組「池上彰のそうだったのか」：日本や世界の名字にまつわる情報を学ぶ。5) 映画「ホテル・ハイビスカス」：琉大出身の映画監督作品を鑑賞し、1970年代の沖縄の状況を学ぶ。6) 情報番組「この差って何ですか」：世界の母の日、立つ大仏・座る大仏・横たわる大仏の差を検証する。7) 情報番組「みんなでニホンGO」：漢字を用いた単語に関する日中の意味の違いを学ぶ。8) 情報番組「沖縄金曜クルーズ」：沖縄の人気バンド、HYを通して平和学習をする。9) 情報番組「沖縄金曜クルーズ」：琉球大学の歴史を紹介する。10) ドラマ「深夜食堂」：テレビドラマを鑑賞する。

以上のように、これらのビデオはすべていわゆる「生教材」（authentic text）であり、外国人向けに字幕をつける、発話のスピードを落とすなどの加工がされているものではない。

3 授業効果の検証

3.1 日本語学習についての調査票

「聴解 CIS」では、学期開始時と終了時に、受講生対象のアンケート調査を実施している。調査項目は、1) 経歴について、2) 日本語聴解能力に関する Can-do statements（以下、Cds とする）、3) 趣味・興味について、4) ニュースについて、の 4 項目である。1) では、受講生の日本語学習

歴、日本滞在歴を確認し、2) は、聴解能力に関する自己評価を確認し、3) 4) では、受講生の興味・関心を確認する。本稿では、2) の聴解能力に関する Cds のデータを分析することによって、授業の効果を検証する。

3.2 聴解能力に関する Can-do statements

本稿で分析対象とする Cds 項目は全 16 項目である(表 1)。受講生は授業開始時と終了後に、聴解能力 Cds の各項目についてどの程度「できる」と思うか自己評価で回答した。なお、授業終了後に Cds に回答する際は、授業開始前に自分が回答した聴解能力 Cds は参照していない。この定量的なデータから聴解の授業受講前と受講後で日本語の聴解能力に関する受講生の自己評価が変化したかどうかを分析する。

表 1 日本語聴解能力に関する Can-do statements

日本語聴解能力について、当てはまるものに○をつけてください。					
1=ほとんどできない(0%) 2=あまりできない(20~30%できる) 3=ある程度できる (50%できる)					
4=だいたいできる (70~80%できる) 5=問題なくできる (100%できる)					
1. 休講や教室変更など、教師の簡単なアナウンスを聞いて、理解することができる。	1	2	3	4	5
2. 「シートを見てください」などの授業中の教師の簡単な指示を聞いて、理解することができる。	1	2	3	4	5
3. 駅のホームや電車の中などで、発着案内や電車の乗り換えなどの簡単なアナウンスを聞いて、理解することができる。	1	2	3	4	5
4. デパートやスーパーなどで、閉店時間や催し物の案内などの簡単な店内放送を聞いて、理解することができる。	1	2	3	4	5
5. ラジオで、近くの町についての簡単な情報を聞いて、いつでもどこでお祭りがあるかなどの情報を理解することができる。	1	2	3	4	5
6. 好きなスポーツに関するテレビニュースを見て、試合の勝敗や好きな選手の活躍など、内容を理解することができる。	1	2	3	4	5
7. 観光地紹介のテレビ番組などを見て、名所や名物など、内容を理解することができる。	1	2	3	4	5
8. テレビニュースを見て、内容を理解することができる。	1	2	3	4	5
9. 茶道や歌舞伎など、日本の伝統文化に関するテレビ番組などを見て、文化の特徴を理解することができる。	1	2	3	4	5
10. テレビニュースを見て、映像やテロップを頼りに、取り上げられている問題の主要な点を理解することができる。	1	2	3	4	5
11. 研究の発表などを、スライドやハンドアウトなどを見ながら聞いて、要点を理解することができる。	1	2	3	4	5
12. 学園ものなどのテレビドラマを見て、話の展開や登場人物の心情などを理解することができる。	1	2	3	4	5
13. アルバイト先で、同僚から仕事のやり方についての詳しい説明や指示を聞いて、理解することができる。	1	2	3	4	5
14. テレビのドキュメンタリーやトーク番組などを見て、内容を理解することができる。	1	2	3	4	5

3.3 結果と分析

本稿の分析対象は「聴解C1S」を受講した30名の外国人留学生である。国籍の内訳は、中国4名、台湾4名、ドイツ3名、インドネシア3名、タイ3名、フランス3名、スウェーデン2名、韓国2名、スペイン2名、アメリカ1名、エジプト1名、ボリビア1名、コロンビア1名の13カ国であり、比較的、多国籍のクラス編成となっている。表2は、30名の留学生が授業開始前と終了後に記入した自己評価の平均値である。

表 2 授業参加学生の日本語聴解力に関する自己評価の変化

Cds No.	日本語聴解力に関するCan-do statements	平均値		
		開始前	終了後	差
1	休講や教室変更など、教師の簡単なアナウンスを聞いて、理解することができる。	4.2	4.5	0.3
2	「シートをみてください」などの授業中の教師の簡単な指示を聞いて、理解することができる。	4.4	4.7	0.3
3	駅のホームや電車の中などで、発着案内や電車の乗り換えなどの簡単なアナウンスを聞いて、理解することができる。	3.8	4.4	0.6
4	デパートやスーパーなどで、閉店時間や催し物の案内などの簡単な店内放送を聞いて、理解することができる。	3.5	4.4	1.0
5	ラジオで、近くの町についての簡単な情報を聞いて、いつどこでお祭りがあるかなどの情報を理解することができる。	3.3	3.9	0.6
6	好きなスポーツに関するテレビニュースを見て、試合の勝敗や好きな選手の活躍など、内容を理解することができる。	3.3	3.7	0.4
7	観光地紹介のテレビ番組などを見て、名所や名物など、内容を理解することができる。	3.4	4.0	0.5
8	テレビニュースを見て、内容を理解することができる。	3.1	3.7	0.7
9	茶道や歌舞伎など、日本の伝統文化に関するテレビ番組などを見て、文化の特徴を理解することができる。	2.9	3.5	0.6
10	テレビニュースを見て、映像やテロップを頼りに、取り上げられている問題の主要な点を理解することができる。	3.1	3.6	0.5
11	研究の発表などを、スライドやハンドアウトなどを見ながら聞いて、要点を理解することができる。	3.0	3.5	0.5
12	学園ものなどのテレビドラマを見て、話の展開や登場人物の心情などを理解することができる。	3.6	3.9	0.3
13	アルバイト先で、同僚から仕事のやり方についての詳しい説明や指示を聞いて、理解することができる。	3.3	3.9	0.6
14	テレビのドキュメンタリーやトーク番組などを見て、内容を理解することができる。	3.2	3.6	0.4
15	人間ドラマやラブロマンスなどの映画を見て、話の筋を追い、内容を理解することができる。	3.5	3.9	0.4
16	観光地で、建築物の特徴や歴史の変遷について、ガイドによる詳しい説明を聞いて、要点を理解することができる。	3.2	3.5	0.3

表2の通り、「聴解C1S」に参加した学生の自己評価を見ると、授業開始前と終了後では、Cdsのすべての項目で自己評価が上昇していた。最も伸び率が高かったのは、No.4の「デパートやスーパーなどで、閉店時間や催し物の案内などの簡単な店内放送を聞いて、理解することができる」であるが、これは留学生として沖縄で日常生活を送る中で自然と身についた能力であると思われる。このほかに、No.3, 5, 13についても同様の理由から比較的伸び率が高くなったと思われる。No.8~15についても、伸び率が高くなっているが、これらは「聴解C1S」のクラスで

経験した聴解活動による影響を受けた可能性があると思われる。このことから、「聴解CIS」という授業は、参加学生の自己評価を上昇させることができたという点では、ある一定の評価ができるといえよう。本稿では、ある学期の30名の学生のデータのみを参照したため、この結果を一般化することはできないが、同様のCdsは、毎学期、すべての聴解クラスで実施しており、どのクラスにおいても同様のデータが得られていることも事実である。今後、より多くのデータを統合し、さらに分析を進めることも可能であると思われる。

4 おわりに

琉球大学において、プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞させていただくのは、2014年、2015年、2016年に続き、4度目となった。身にあまる誠に光栄なことである。ただ、今回の受賞は、これまでとは異なる点があった。それは、前述したように受講生である留学生が、授業を自分自身で選択し、受講したことである。留学生の属性や国籍、経歴も様々であり、すべての受講生のニーズや希望に応えることはたやすくはなかったが、非常にやりがいのある充実した授業体験ができたことは教師として、何物にも代えがたい貴重な経験となった。この経験を糧に今後も研鑽を積んで行く所存である。授業に参加してくれたすべての留学生に感謝したい。

注

i CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching assessment) とは、「欧州域内で国や言語の違いを超えて、言語 (外国語) 教育専門家 (テスト開発期間や行政担当官を含む) などが言語学習, 教授法, そして, 評価法に関する 相互理解およびコミュニケーションを促進するための基盤となる参照枠組みを提示した 文書」である。(野口・大隈, 2014)

引用文献

笹島茂 (2020) 「CLILとは」日本CLIL教育学会 <https://www.j-clil.com/clil> (2020年10月2日閲覧)

野口裕之・大隈敦子 (2014) 『テストニングの基礎理論』研究社

Mendelsohn, D (1995) *Learning to Listen A Strategy-Based Approach for the Second Language Learner* Dominie Press, Inc.

O'Malley et al (1989) *Listening Comprehension Strategies in Second Language Acquisition* *Applied Linguistics* 10, No4. pp.418-437

Ur, Penny (1984) *Teaching Listening Comprehension* Cambridge University Press